

反義語の分類と用例

—『百人一首』に於ける反義語を考察する—

清 海 節 子

1. はじめに

反義語は、対義語または反対語等とも呼ばれ、英語の‘antonym’や‘opposite’に相当する。本稿では、対立する意味のペアを成す語の総称として「反義語」を使用する。本論の目的は、反義語の分類方法を概観して、『百人一首』の反義語を検討することである。どのような性質の反義語がどの程度用いられているかについて調査する。和歌を対象とし、創造的な反義語も含まれていると思われるため、反義語の基準は緩やかにする。

Cruse(1986:197)に従うと、反義語は、意味の共通点が認められる語の間で成立する関係を表すが、一つの次元では両極端にあり、他の次元では同じであるという逆説的な性質をもっている。われわれは、反義語は、直感的には、意味が最大限に離れていると感じられるが、実際には、言い間違えをする時は、反義語が選ばれることが多いことから分かるように、反義語ペアの分布がほとんど同一であることに気づくのである。また、Murphy(2003:10-11)によると、言語話者は反義語にかんして、典型的で良い例とあまり良くない例を直感的に区別することができる。例えば、[大-小]の関係性を表す英語の典型的な例は、[large-small]や[big-small]であり、文脈がない自由連想で言われたり、子供のための本に収集される標準的(‘canonical’)な反義語ペアである。これに対して、[large-little]は、文脈によっては使われることもあるが、一般的には反義語とはみなされないで、非標準的(‘non-canonical’)であると考えられる。

本稿では、反義語は、いわゆる対義語、反対語、対照語と言われる二語で、意味が必ずしも正反対

とは言えなくとも、対比されていると思われる語彙は考慮に入れる。全般的に緩やかな基準で、できるだけ多くの用例を扱うことにする。また、以下では、AとBが対比され、対立した関係として扱われるペアを、便宜上、[A-B]と表記する。

以下、2節では、反義語の分類について、本稿で参考にする4冊の反義語辞典の考え方を紹介する。次に2.2では意味特徴の観点から反義語を分類した研究を概観した後、2.3では、森岡(2008a)の提案する抽象概念に基づく分類を説明する。3節では、『百人一首』の成立と和歌の表現技法について確認する。4節では、『百人一首』に於ける反義語の用例を検討する。5節では、反義語の意味変化について日英各言語での興味深い例を取り上げる。6節では、結論が述べられる。

2. 反義語の分類

一般的に反義語はどのように理解されているのだろうか。『研究社 日本語教育事典』(2012)を参照してみよう。英語の‘antonym’に当たる語は、反意語、反義語、反対語とも呼ばれるが、この事典では「対義語」と呼んでいる。対義語は、共通要素を持つ一方で、正反対の意味を持つから、類義語の一種と考えられている。反義関係には、「表-裏」のような一方が成り立つと他方が成り立たない両極的反義と、程度の差があるが連続的な反義関係「高い-低い」があると考えている。さらに、「戦争-平和」のような語義の一部が対立した反対関係、「あげる-もらう」のような両方が同時に成立し方向が逆である逆義関係、また「前-後」のような中心点を基準に対立する対立関係などがある。換言すると、この事典では、反義語

は、両極、連続、反対、逆義、対立に5分類されている。このような分類方法はある程度共有されているのであろうか。以下、この節では、反義語の分類について、2.1では、本稿で参考にする各辞書の考え方を紹介し、次に2.2では、意味特徴に基づく先行研究、2.3では、本稿が採用する抽象概念に基づく森岡(2008ab)の考え方を説明する。

2.1 辞典の分類

反義語は、辞典によって、独自の捉え方をしている。本稿で参考にする4冊の辞書は、反義語という名称は使わず、「反対語」または、「反対語・対照語」と呼んでいる。以下、それぞれの考え方を紹介していく。

『反対語対照語辞典』(1998)の収録語数は13000語で、前書きによると、単語は、ばらばらでなく、ネットワークを成しており、「父」「お父さん」「おやじ」「ばば」などは、同ニュアンスが違うがほぼ同じ意味を指すので、同義に近い類義語と言える。しかしながら、反対語の定義は複雑で、同義語・類義語が同じものを指すという基準があるが、反対語は、そのような単純な条件では説明が不十分である。「父」と「母」が反対語になるのは、〈親〉という共通の意味をもつと同時に、男性か女性かという基準によると反対の意味になるからである。従って、反対語の条件を次の2点としている。

- (1) i) 共通する意味をもっていること
- ii) その上で、ある基準から見て、反対の意味をもっていること

また、反対語は、一つとは限らない例として、「大勝」には、「大敗」と「辛勝」があり、その差は、次の通りである。[大勝-大敗]は、大差で勝負がつくという共通の意味があるが、勝ち負けという基準で反対の意味がある。[大勝-辛勝]は、勝つという共通の意味があるが、勝ち方が大差か少差かという基準で反対である。この辞典では、範囲を緩やかにし、反対語とそれに類する語を多

くあげ、言い換え(同義語や類義語)もできるだけ含めたと述べている。

次の辞書『三省堂反対語便覧』(2008)は、約12000語が収録されているが、四冊の中では反義語が最も簡略化された方法で提示されている。しかし、最後に付録として、「反対語とは」という解説があるので、見ることにする。最初に「反対語」は「反意語」「反義語」「対義語」とも呼ばれると説明された後、以下に示す6つのグループに分類されている。

- (2) i) 最も典型的な反対語：一方の語の意味を否定すると他方の語の意味になる
例:[そと-なか][ある-ない][あたる-はずれる]
- ii) ある語をはさんで対極にあると意識される反対語
例:[過去-未来](「現在」をはさんで対立)[上-下](「中」をはさんで対立)
- iii) ii)に近いが、中間と思われる語がなく反対の関係にあると意識される語
例:[始まる-終わる][もと-すえ][開会-閉会]
- iv) 意味の方向性が互いに逆向きになる反対語
例:[貸し-借り][勝つ-負ける][行き-帰り][のぼり-くだり]
- v) 意味自体に対立する要素はないのに、反対語として意識される語
例:[たて-よこ][泣く-笑う][戦争-平和][丸い-四角い]
- vi) 複数の語を反対語としてもつもの
 - (a) 単純な意味の語が複数反対語と関係する場合
例:[山-海][山-川]／[海-山][海-陸]
 - (b) 多義語の場合の複数の反対語
例:[薄い-厚い][薄い-濃い]／[きつい-やさしい][きつい-ゆるい]
 - (c) 反対の意味をあらわす語が複数あるもの
例:[高価-安価・廉価][高尚-低俗・下劣][形式-内容・実質]

人][泣く-笑う][和式-洋式]

『三省堂反対語対立語辞典』(2017)は、上で紹介した辞書と同じ編者が、見出し語総数を16000項目に増やし、新語、擬態語、ことわざ・慣用句までの幅広い種類の語句を集めたものである。最初のページの「はじめに」では、「反対語」とは「なんらかの観点で意味が反対の関係にあると見なされる語」としている。またその名称は「反意語・反義語・対語(たいご・ついで)」があり、中学・高校の国語教科書では「対義語」と呼ばれるが、その理由は、機能、役割、因果関係、空間時間的位相などの広い観点から、ペアになる語を捉えようとするからだと書かれている。「本書の編集方針・特色」の最初で、語句の対立関係を認める観点を以下のように6つのグループに分けている。

(3) i) 「不・非・無・反・未」などの付く語と元の語

例:[自由-不自由][経済的-非経済的][比例-反比例][成年-未成年]

ii) 二者のうちいずれかである物事

例:[アウト-セーフ][ある-ない][表-裏][既刊-未刊][肯定-否定]

iii) 認識上、物事を成り立たせている二つの要素

例:[心-体][時間-空間][縦-横][内容-形式][物質-精神]

iv) 並・普通であること、中央・現在などの起点を挟む、相対的・対称的な概念

例:[長い-短い][無知-博学][過度-適度][好む-嫌う][悲観-楽観]

v) 相互の役割や機能、始まりと終わり、動きの方向、主従など、逆の関係にある物事

例:[相手-自分][売る-買う][問い-答え][加害-被害][主食-副食]

vi) その他、一般に対比的・対照的に慣用されるさまざまな組み合わせ

例:[アクセル-ブレーキ][学生-社会

『活用自在反対語対照語辞典』(2006)は、およそ15000語収録し、「はじめに」で、一般に「反対語」「対義語」と呼ばれる関係の語をこの辞典では「反対語・対照語」として扱い、項目を選ぶのに、次の6基準を目安にしたと書かれている。

(4) i) 一方の言葉を否定すると他方の言葉の意味になるような対立関係にある語

例:[表-裏]

ii) ある中間的な基点をはさんで対称の位置にあるような対立関係にある語

例:[昨日-明日][暑い-寒い]

iii) 意味の方向性が互いに逆向きになる対立関係にある語。あるいは連続的でありながら、程度や段階によって互いに逆向きになる対立関係にある語

例:[勝つ-負ける][重い-軽い]

iv) 対照的な意味として、あるいは対となる語としてとらえられ、二語が対照・対比され、あるいは対峙するような関係にある語

例:[先生-生徒][戦争-平和]

v) 語の意味のうえではかならずしも1対1の対立関係にはないが、一つのまとまった関連度として鼎立(三語)あるいは四立(四語)し、相互に対比される関係にある語

例:[感性-悟性-理性]

vi) 一見反対語あるいは対照語のようでありながら対立関係の不明確なもの、あるいはむしろ類義語の範疇に入るようなもの、さらに「反-」「非-」「不-」「無-」などの否定的な接頭辞のついた語のうち熟語または反対語・対照語として慣用されないものは、原則として除外した。

例:[椅子-机][月-すっぽん][日本語-非日本語]

(4vi)の[椅子-机][月-すっぽん]などは、2.3で説明する森岡(2008a)のセット語に相当すると考え

られるが、この辞典では扱われていない。

以上、4冊の辞書の反義語の分類基準を概観して分かることは、各辞書、それぞれの観点があり、同じではない。『反対語対照語辞典』(1998)は、反対語の条件を最小限にすることに留め、分類はしていない。つまり、最もシンプルな条件(1)をあげるだけである。しかしながら、唯一、反義語には共通する意味がある前提について述べている点が注目される。『反対語対照語辞典』以外では、共通する基準として、(2i)(3ii)(4i)「二者のうち一方の語の意味を否定すると他方の語の意味になる」(例：[表-裏][ある-ない][あたる-はずれる])が認められる。これは最も典型的な反義語のタイプであり、理解しやすいことを裏付けている。また、(2v)(3vi)にみられるように、意味的には反対ではないが、慣用的に対比されるものを認めている。また、1対1の関係ではなく、三語以上の組み合わせ(2vi)(4v)についても言及している。

2.2 先行研究：意味特徴に基づく分類

反義語の先行研究にかんして、清海(2010, 2011)で取り上げたので、ここでは、簡略化した説明に留める。反義語の捉え方は学者によって異なり、分類の方法や種類もさまざまである。ここでは、意味特徴の観点からの反義語をグループ分けしている6人の考えを取り上げる。

森田(1996:199-213)は、意味特徴の面である1点が対照的な正反対の関係にある語彙を「反義語」(例：[白-黒][善し-悪し])と呼び、指示対照が明らかに異なるが意味特徴の点では正反対とは認められない場合は、「対義語」(例：[山-川]、[兄-弟])と呼ぶ説があると述べている。さらに、対義・反義の関係を以下の観点から検討している：「肯定・否定関係(例：[ある-ない])」「程度の大小関係(例：[大きい-小さい])」「両極関係(例：[金持ち-貧乏])」「程度性を持つ対義語(例：[甘い-辛い])」「方向性の関係(例：[右-左][押す-引く])」「復元・回復動作(例：[点ける-消す])」「視点による対立(例：[貸す-借り

る])」「対義の視点からみた相手同士(例：[先生-生徒])」。結論として、これらの観点からみて反義関係と対義関係は明確に区別されるものではないと主張している。

池上(1982)は、「反意性」(‘antonymy’)の意味関係は、少なくとも次の三通りに区分されると述べている。第一は、相互矛盾する二項から成り立つ[男-女][表-裏][前-後][内-外]のような同次元で対立し、一方の否定が他方の肯定を含意するペアである。即ち、二項間は、連続しておらず、明確に独立している。第二は、[行く-来る][売る-買う][教える-習う]などのような方向性または、視点が逆転している関係で、池上は「換位関係」として扱っている。そして、換位関係にある表現は、基本的には、[行く-来る]という対立に還元できると主張している。¹⁾ 三番目は、狭義の反意性で、[大-小][高-低][善-悪][黒-白]のように、二項が連続して明確な境界線がない関係である。ある基準からみて、ある程度一方の極に近い部分と他方の極に近い部分の名称が選ばれてペアとして用いられるので、「大きくない」と否定することが、必ずしも「小さい」を表すわけでなく、[男-女]のような相互矛盾はしない。故に、子象は象としては「小さい」が、動物としては「大きい」と言うことも可能になる。狭義の反意性では、尺度の比較的高い方を指す項が尺度全体を指すことが一般的であると指摘している。例えば、どの程度の大きさかを知りたい時、「それは、どのくらい大きいですか」と聞き、「それは、どのくらい小さいですか」とは、ふつう言わない。後者を用いる場合は、前提として対象が小さいとわかっている場合に限定されている。このように、対立する二つの項の関係性を、「無標」(‘unmarked’)と「有標」(‘marked’)という術語で捉えられると述べている。[大きい-小さい]との関係では、「大きい」がどちらとも特徴づけられていない「無標」の項であり、「小さい」がどちらか一方の特徴を有する「有標」の項である。

同様に、Leech(1981)も主要な反義語を3分類している。まず、[alive-dead]のような2項(ま

たは多項)の分類的対立を‘taxonomic opposition’ (分類学的対立)と呼び、次に[large-small]のような分類的でなく、尺度を基準にした対立を‘polar opposition’ (極性対立)とし、3番目は、[own-belong to][up-down]のような方向性の対立に関連する反義語を‘relative opposition’ (関係性対立)と名付けている。さらに、一般的ではないが、‘hierarchic opposition’ (階層的対立)という順序を成した対立があることも指摘している。例えば、長さの単位[inch-foot-yard]²⁾や、週 [月曜日～日曜日] や暦の単位 [1月～12月] また、[1-2-3-...]のように、終わりに制限のない数などがあげられている。

Cruse(1986)は、反義語を‘complementaries’ (「相補的反義語」例: ‘true’-‘false’, ‘dead’-‘alive’, ‘open’-‘shut’), ‘antonyms’ (「段階的反義語」), ‘directional oppositions’ (「方向的反対語」)に3分類した上で、各分類の下位タイプを詳細に考察している。例えば、‘antonyms’は、両語とも擬似比較級の‘polar antonyms’ (「極性反義語」例: ‘long’-‘short’, ‘deep’-‘shallow’, ‘wide’-‘narrow’), どちらか一語が擬似比較級である‘overlapping antonyms’ (「部分重複反義語」例: ‘good’-‘bad’, ‘pretty’-‘plain’, ‘kind’-‘cruel’), 両語とも真性比較級である‘equipollent antonyms’ (「等価反義語」例: ‘hot’-‘cold’, ‘happy’-‘sad’, ‘nice’-‘nasty’)という3グループに区別している。また‘directional oppositions’の中には、‘antipodals’ (「正反対の対立語」例: ‘top’-‘bottom’, ‘cellar’-‘attic’, ‘head’-‘toe’), ‘reversives’ (「反転した対立語」例: ‘rise’-‘fall’, ‘enter’-‘leave’, ‘tie’-‘untie’), ‘converses’ (「逆関係の対立語」例: ‘above’-‘below’, ‘guest’-‘host’, ‘follow’-‘precede’)等がある。

Lyons(1977:270-290)は、反義語を次のように4分類している。第一に、連続した尺度に基づく‘antonymy’ (「段階的反義語」例: ‘long’-‘short’, ‘old’-‘young’, ‘hot’-‘cold’), 第二に、2語の間に中間的段階がない‘complementarity’ (「相補性」例: ‘male’-‘female’, ‘present’-‘absent’,

‘married’-‘single’), 第三に、ある種の方向性に基づく‘converseness’ (「逆関係」例: ‘husband’-‘wife’, ‘bigger’-‘smaller’, ‘kill’-‘was killed’), 第四に、以上の三分類と必ずしも区別されないが、ある場所の対立した方向の動きが暗示される‘directional opposition’ (「方向性対立」例: ‘up’-‘down’, ‘arrive’-‘depart’, ‘come’-‘go’)と呼ばれるタイプも重要であると述べている。

反義語を4分類以上に分ける見解の一つが、村木(2002)で、反義語を以下のように7つのタイプに分けている:「相補関係に基づく反義語」(例:[男-女][等しい-異なる][あたる-はずれる]);「両極性に基づく反義語」(例:[満点-零点][最高-最低][はじまる-おわる]);「程度性をもつ反義語」(例:[大きい-小さい][早い-遅い][安全な-危険な]);「反照関係に基づく反義語」(例:[入口-出口][売る-買う][教える-教わる]);「たがいに相手を前提とした反義語」(例:[親-子][先生-生徒][本店-支店]);「変化に関する反義語」(例:[あがる-さがる][寝る-起きる][生産-破壊]);「開いた反義語」(例:[和室-洋室][たて-よこ][一般-特殊])。最後のタイプ(「開いた反義語」)は、本来は反義的な意味でないが、しばしば二つの側面を取り出し対比を繰り返すと、両極性が容認されるようになり、二値性を読みとることができるようになると説明している。

以上、6人(森田、池上、Leech、Cruse、Lyons、村木)の考えをみて分かるように、反義語の分類方法や名称が一定でなく、どれが最善であるかを決めるのは難しい。基本的には、相補性、段階的、方向性に基づく反義語が中核を成すと思われる。一方で、森田と村木が考慮に入れている、本来反義性が認められない[山-川]、[和室-洋室]、[たて-よこ]のような、慣習的に対比されているペアで、われわれが反義語であると感じるようになった例も無視することはできないであろう。

2.3 森岡(2008a)：抽象概念に基づく分類

清海(2010)は、ことわざの中の反義語、清海(2012)は、日英のなぞなぞに於ける反義語を考察したが、その際、以下に紹介する森岡(2008a)の分類基準を採用した。森岡は、反義語がことばの世界の出来事で、我々の認識行為と関わるため、抽象概念を用いて反義語の性質を検討することを提案している。この考え方の利点は、対語の組み合わせを品詞で区別するので、調査しやすいことである。また、用いられている反義語の中でどの概念が多いかを知ることが可能になる。これらの理由から、本稿も基本的には、次に示す森岡の分類に従うことにする。森岡は、抽象概念は、どの言語でも共通して反義語が生じると提案し、次のように「関係概念」「形情性概念」「動作性概念」の三種類の概念に分けている。

(5) (i) 関係概念---名詞・副詞

(a) 時間---例：[朝-夕]，[きのう-あす]

(b) 空間---例：[上-下]，[左手-右手]

(c) 人間関係---例：[おじいさん-おばあさん]，[父-母]

(ii) 形情性概念---形容詞・形容動詞

例：(和語系語基) [大き-小さ]，[高-低]

(漢語系語基) [忙-閑]
[静-動]

(iii) 動作性概念---動詞：肯定と否定、能動と受動、相対的対立

森岡によると、具体名詞は反義語ではなくセット語であると主張している。³⁾ 例えば、「梅に鶯」「手と足」「椅子と机」「パンとバター」「花とだんご」の組み合わせなどは、反義語でも、同義語でもないので、セット語と呼んでいる。しかしながら、具体名詞は比喩的または、象徴的に用いられた場合のみ、反義語として成立するのではない

かとも述べている。それは「狼に羊」は[粗野-柔順]、「うさぎと亀」は[油断-忍耐]、「月とすっぽん」は[上等-下等]というように、抽象的な概念の対立を、狼/羊，うさぎ/亀，月/すっぽん，という具体名詞に託していると考えられるからである。森岡は、これを比喩的(象徴的)用法と呼んでいる。しかし「花と嵐」「月にむら雲」のような即物的に相容れないものの対立は、[好ましいもの-好ましくないもの]という象徴的意味がないわけではないが、これらの対立は絶対的でなく「花と嵐」「花と雨」「月と蛍火」のように他の組み合わせもできる。そこで、森岡(2008a:47)は、反義語を対義語という用語で、次のように明瞭に説明している。

すなわち、具体名詞の対義語は、言語そのものに備わっている本来の対義語というより、実生活の中で「好いもの・悪いもの」といった釣り合いのとれないものを象徴的に示そうとするときに生まれるようである。そういう点で、具体名詞の対義語は多分に人為的あるいは文化的で、時代や社会環境によって差がでてくる。つまり、ゆれが多いということである。

以上のことは、国によって諺の言い方がさまざまであることから知られているとし、中国の諺の「鶏口となるも牛後となるなかれ」は、下線部分の対立が、イギリスでは、ロバの頭—馬の尾、またフランスでは、かますの頭—鮫の尾になると述べている。⁴⁾

また、森岡(2008b:62-63)は、反義語は、文脈を入れずに、観念的に比べた方が、明確に把握しやすいが、実際の用法では、常に一定の対立があるわけではないと述べている。芭蕉の俳句で、「おくられつおくりつ果は木曾の秋」の下線部分の対比は、受動と能動の純粋な反義関係とみなされるだろうが、以下の句の下線の部分は、新しい反義関係の創造がみられるという。

(6) (i) おもしろうてやがてかなしき鶴船哉

- (ii) 旅寝して見しや浮世の煤^{すす}払ひ
- (iii) 神垣^{かみかき}や思ひもかけず涅槃^{ねはん}像
- (iv) やがて死ぬけしきは見えぬ蟬^{せみ}の声
- (v) 稲妻^{いなづま}や闇^{くら}の方行く五位^{ごゐ}の声

森岡の挙げた上の句の反義関係は、分かりやすさの程度の違いがあることは否めない。(6i)[おもしろい-かなしい]と(6v)[稲妻-闇]は、何らかの反義関係があることを認めるのは難しくない。具体的には、(6i)には、[楽しい-悲しい]、(6v)には[光-闇]の対立が基本にあることは自然に感じられる。また、(6iv)[死ぬ-蟬の声]は、動詞と名詞句の対比であるが、「蟬の声」が「生きる」ことを象徴的に表現していると理解すれば、反義関係[死ぬ-生きる]が浮かぶであろう。しかし(6ii)[旅寝-浮世]、(6iii)[神垣-涅槃像]のそれぞれ^{ねはん}の二語の対立は反義性と結びつけるのは他の3句に比べると容易だとは思われない。

以上みてきたように、実際の用法には、新しい反義関係をもつ二語が創造されるということから、次節以降での反義語の分析には、森岡の提案する分類を基準にはするが、名詞にも反義関係が成立するとみなし、考慮に入れる。従って、①名詞 ②関係概念 ③形性情概念 ④動作性概念 の四分類を利用することにし、森岡(1987a)の考えを取り入れながらも、反義語についての基準は緩やかに捉え、反義性を帯びて対比され得る語にかんして検討していく。

3. 『百人一首』の成立と技法

『百人一首』の短歌にはどのような反義語が用いられているかを調査する前に、まず、3.1では、『百人一首』の成立について短く説明する。次に、3.2では、和歌の表現の技法(レトリック)を紹介する。

3.1 『百人一首』の成立

鈴木(他)(2012:2-3)によると、『百人一首』は、いわゆる『小倉百人一首』を指すが、鎌倉時代の藤原定家(1162-1241)が古来の秀歌を百人から一

首ずつ選んだもので、合計百首から成る歌集である。最近の研究では、定家が選んだ百首と現在伝わっている『小倉百人一首』との間に、少し違いがあることが分かり、子息の為家の代あたりで、多少の補訂がされたと考えられている。選ばれた百人は、約10世紀はじめの『古今集』から13世紀初頭の『新古今集』までの傑出した王朝歌人である。古代の歌人、天智天皇、持統天皇、柿本人麻呂の作も含め、各時代の典型的な作風の歌が時代順に集められている。百首の内容は、四季折々の自然の歌と男女の恋の歌が中心となっている。現代では、かるた競技としても親しまれている。⁵⁾

3.2 和歌の表現技法

鈴木(他)(2012:130-131)には、和歌の表現技法が次の10項目紹介されている：①「枕詞」②「序詞」③「掛詞」④「縁語」⑤「見立て・擬人法」⑥「歌枕」⑦「体言止め」⑧「本歌取」⑨「倒置法」⑩「句切れ」である。以下、それぞれ短く説明する。

(7)①「枕詞」

働きは、「序詞」とほぼ同じである。語句の直前に置くことで、声調を整え、印象を強くし、具体的なイメージを与える。「ひさかたの」というような五音句からなり、固定性が強く、特定の語句にかかる。

②「序詞」

語句に具体的なイメージを与える七音以上の長さの語句であり、繋がり(以下例の括弧で囲んだ語句)によって三分類される。

- i) 同音同義語(比喻による)：例「あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながしき夜をひとりかも寝む」
- ii) 同音異義語(「掛詞」による)：例「難波^{なみの}湯みじかき芦のふしの間も
- iii) 同音反復 例：「住みの江の岸による波^{なみ}さへや」

③「掛詞」

同音異義の二語を重ねる表現技法で、一方

が自然の景物でもう一方が心情や状態を表すことが多い。

例：「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も

草もかれぬと思へば」

(「かる」 = 「離る」・「枯る」)

④「縁語」

意味的に関連する語句を用い複雑なイメージを創出する表現技法。

例「名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな」

(「くる」 = 「来る」・「繰る」が「さねかづら」と縁語)

⑤「見立て・擬人法」

ある事柄を別の事柄になぞらえ、連想力や想像力を広げる表現技法で、擬人法は、人間になぞらえたもの。

例「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」(「紅葉」を

「しがらみ」に見立て：「しがらみ」をかけたのは「風」と擬人化)。

⑥「歌枕」

特定の連想を促す地名。例：「宇治」(京都府宇治市一帯)、「末の松山」(陸奥)、「竜田」(奈良県吉野郡吉野町一帯)、「小倉山」(平安時代以後---京都市右京区嵯峨の大堰川をはさみ嵐山に向き合う山で紅葉の名所：『万葉集』では、奈良県桜井市近辺の山を指す)

⑦「体言止め」

歌の末尾が体言で止める技法で、述語が欠けた印象を読み手に想像させる。

例「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ」

⑧「本歌取」

ある歌の語句の一部をそのまま使用することで、本歌の心情・趣向を取り入れる技法。

例「見せばやな雄島のあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず」

(本歌：「松島や雄島の磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか」(『後拾遺集』)

⑨「倒置法」

主語と述語、修飾語と被修飾の順序を逆転させる技法。

例「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」

(上の句と下の句が倒置されている)

⑩「句切れ」

複数の文から成る歌で、万葉時代は二・四句切れ、古今集時代は三句切れ、新古今時代は初・三句切れが多い。

二句切れ「春過ぎて 夏来にけらし／白妙の衣干すてふ 天の香具山」

三句切れ「天つ風 雲の通ひ路 吹きとちよ／をとめの姿 しばしとどめむ」

渡部(2008)は、上の10項目の、③「掛詞」と④「縁語」というレトリックをどのように考えるべきかに言及している。『百人一首』には、掛詞や縁語が用いられた歌の割合が相当多いと述べている。例えば、80番以降歌の少なくとも半数に、掛語か、掛詞と縁語の両方が使われている。『千載集』や『新古今集』の歌人は、それほど掛詞や縁語を好んでいたわけではないと考えられるので、これらのレトリックが多い理由は、編集時の藤原定家の感覚によるものではないかという。つまり、定家はことばの偉力に対してこだわりをもち、掛詞や縁語のような技巧は人知を超える力があることに心動かされたのではないかと想像している。

以上、10種のレトリックをみたが、反義語用法は含まれていない。清海(2011)は、日本語のことわざの反義語を考察し、「聞いて極楽見て地獄」「海のものとも山のものともつかぬ」「恩を仇で返す」「明日の百より今日の五十」「一長一短」「会うは別れの始め」の下線部分に対立した語のペアが用いられていることを示した。これらは、奥津(2000)が「対照法(‘antithesis’)」という修辞学上の技法とみなしもので、意味を強め表現を面白くする役目をしていると考えられる。奥津(2000)は、修辞上の技巧の一つに対照法を挙げ、反義語を使用することで、ことわざの表現力が強

化されていると述べている。清海(2011)の結論では、品詞は、形容詞・形容動詞が反義語として使用される頻度がやや高く、意味的には「空間」に関連する語彙が多かった。空間に関する語彙が視覚に訴え理解することを容易にし、ことわざの意味を強調する役割を果たすのではないかと推測した。

4. 『百人一首』の反義語

本節で、『百人一首』の短歌には、どのような性質の反義語がどの程度用いられているかを検討する。和歌を対象としているので、創造的な反義語もあるはずなので、反義語の分類は、森岡(2008a)に従うが、森岡の基準を緩やかにし、森岡の定義では、セット語だと判断される組み合わせでも、2節で取り上げた4冊の反義語辞典で確認できるものや、反義性が連想される場合は、反義語として扱った。結果は以下にまとめるが、和歌一首に反義語1組が含まれている場合がほとんどで、2組の反義語が一つの歌に使用されている数は3例だけであった。3組以上の反義語が含まれる歌はなかった。以下、最初に1組の反義語が含まれる歌について分類と考察をする。4.1では名詞、4.2は関係概念、4.3は形状性概念、4.4では、動作性概念の例を扱う。2組の反義語が一つの和歌に見つけられる例は、4.5で別個に取り上げる。また、百人一首には、歌番号がつけられているので、歌の最初の{ }に番号を入れた。⁶⁾ 反義語には下線が施され、歌の後に、作者名、さらに()には、鈴木(他)(2012)を参考に歌の意味を書き入れた。⁷⁾

4.1 名詞

森岡(1987a)は、名詞をセット語とみなしているが、本稿では、反義語関連辞典で扱われている場合また、反義性を帯びていると判断される語のセットは、反義語として考えることにした。また、名詞の意味から、「場所を表す名詞」、「色彩名詞」、「その他」に分けている。名詞の反義語は、以下のように9例である。

4.1.1. 場所を表す名詞

- (8) 「{4} 田子の浦に うち出てみれば 白妙の 富士のたかねに 雪は降りつつ」山辺赤人
(田子の浦にでてみると、真っ白な富士の高嶺にしきりに雪が降っていることだよ。)
・「浦」は、海辺の意味で、「富士」は山を表すので、[海-山]の対立が認められる。

- (9) 「{7} 天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に いでし月かも」阿倍仲麻呂
(大空をふり仰いではるか遠くを眺めると、今見ている月は、かつて奈良の春日にある三笠山の上に出ていた月と同じ月なのだなあ。)
・「天の原(大空)」と「山」を、[空-山]の対立として捉えられる。

- (10) 「{69} 嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 龍田の川の 錦なりけり」能因法師
(嵐の吹きおろす 三室の山のもみぢ葉は、龍田の川の 錦なのだった。)
・[山-川]の対立がある。

- (11) 「{94} み吉野の 山の秋風 さよ更けて 故郷 寒く 衣うつなり」参議雅経
(吉野の 山の秋風が夜ふけて吹きわたり、古京である吉野の里は寒く、寒々と衣を打つ音が聞こえてくる。)
・「み吉野」は奈良県の「吉野」のことであるが「野」という語を含んでいる。『活用自在 反対語対照語辞典』では、「野」が平らな土地で、「山」が平地より隆起した土地であり、反義語([野-山])とされる。

(8)から(11)までの対立：[海-山][空-山][山-川][野-山]の全ては、参考にした反義語辞典で見つけることができる。

4.1.2 色彩名詞

- (12) 「{6} かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白

きを見れば 夜ぞ更けにける」中納言家持
(かささぎが翼をつらねて渡したという橋——
宮中の御階みはしにおいている霜が白いのを見ると
もう夜も更けてしまったのだった。)

- ・「白き」に対して、「夜」が「黒」を連想させることから、[白-黒]の対立が含蓄されている。

4.1.3 その他

(13) 「{23} 月みれば 千々に物こそ 悲しけれ 我が身ひとつの 秋にはあらねど」大江千里
(月を見ると、あれこれと際限なく物事が悲しく思われるなあ。私一人だけの 秋ではないけれども。)

- ・「千々」と「ひとつ」つまり、[1000-1]の対立がある。

(14) 「{28} 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば」源宗千朝臣
(山里は、冬がとくに寂しさがまさるものだった。人も訪ねてこなくなり、草も枯れてしまうと思うので。)

- ・「人目」とは「人」を表し、「人目も草も」は「生命あるもの全て」という意味である。つまり、命があるのは「人」と、自然全体を象徴する「草」から成立していると考え、反義語辞典にも示されている[人-自然]の対立がある。

(15) 「{36} 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ」清原深養父
(夏の夜は、まだ宵のままと思っているうちに明けてしまったので、いったい雲のどのあたりに月は宿をとっているのだろうか。)

- ・「雲」と「月」の対比には、[好ましくないもの-好ましいもの]という象徴的対立関係が含まれていると解釈できる。

(16) 「{57} めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬまに 雲がくれにし 夜半の月かな」紫式部

(久しぶりにめぐりあって、その人かどうかい分けがつかないうちに、雲間に隠れてしまった 夜半の月のように、あの人をあわただしく姿を隠してしまったことですよ。)

- ・「雲」と「月」が、[好ましくないもの-好ましいもの]として対立している。

4.2 関係概念

森岡は、厳密な意味での反義語は、関係概念に存在すると述べている。その理由は、現在の自分を中心にして見える世界認識の基本になっているからである。関係概念は認識するための区分概念としてあらゆる言語に存在し、異言語間で最も共通性が高い概念であると捉えている。以下に示す通り、「時間」、「空間」、「人間関係」に分けられている。

4.2.1 時間

森岡(2008a:174-75)は、反対概念の組み合わせの「朝-夕」「朝-晩」は、反義語であるが、「朝-夜」「昼-晩」はセット語としている。また、中間点の両極にある「きのう-あす(あした)」「おととい-あさって」「去年-来年」は反義語で、中間と前後関係にある「今日-昨日」「今日-明日」「今月-来月」等はセット語であると考えている。しかし本稿では、反義語の辞典で確認することができる場合、または、反義性が感じられる要素を含む場合には、反義語とみなした。

(17) 「{2} 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣干すてふ 天の香具山」持統天皇

(春が過ぎて夏が来てしまっているらしい。夏になると真っ白な衣を干すという天の香具山なのだから。)

- ・[春-夏]の対立を反義語とみなす。季節(春夏秋冬)の反義語については、4.2.1の最後で取り上げる。

(18) 「{43} 逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔は物も 思はざりけり」権中納言敦忠

- (ついに逢瀬を遂げてみると、その後の恋しい気持ちにくらべると、以前の恋心などは、何も思っていなかったのと同じであったなあ。)
- ・辞典では、[昔-今]という反義語が見つかるが、「後」は、恋人に逢った後のことで、「昔」は、その恋人に逢う「以前」を意味するので、その対立[後-前]が意味されていると思われる。
- (19) 「{54} わすれじの 行末までは かたければ けふをかぎりの 命ともがな」儀同三司母
(いつまでも忘れまい、とおっしゃるそのお言葉が、遠い将来までは頼みにしがたいので、そのお言葉のあった今日という日を最後とする私の命であってほしいものです。)
- ・「行末」は、将来・未来を意味するので、典型的な反義語は、「過去」や「昔」になるかもしれない。しかし、この歌では「けふ(今日)」と対比され得る。『反対語対照語辞典』では、「将来」の反対語は、「過去、往時、現在、現今」であることから[将来-現在]の反義性があると考えられる。
- (20) 「{61} いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ 九重に 匂ひぬるかな」伊勢大輔
(昔の 奈良の都の八重桜が、今日は九重の宮中で、ひときわ美しく咲きほこっていることですよ。)
- ・「いにしへ」は、遠い過去を意味し、『現代語から古語を引く辞典』では、「昔」の古語には、「いにしへ」も挙げられている。ところで「今日」の反対語は「昨日、あす、あした」である。しかし「けふ(今日)」は「今」と捉えることできる。従って、「いにしへ」と「けふ」は、[昔-今]に相当する反義語として解釈され得る。実際『反対語対照語辞典』には、[昔-今]の対立がある。『活用自在反対語対照語辞典』も[昔-今]という反義語を載せ、さらに「今」の意味は「現在、今日」と書かれている。
- (21) 「{84} ながらへば またこのごろや しのばれむ うしと見し世ぞ いまは恋しき」藤原清輔朝臣
(この先、生きながらえるならば、つらいと感じているこの頃もまた、懐かしく思い出されることだろうか。つらいと思って過ごした昔の日々も、今では恋しく思われることだから。)
- ・『旺文社全訳古語辞典』では、「世」の意味の一つに「ある時節・折・時」があり、「昔」と訳されている。そこで、「いま」と対比され[昔-今]という反義関係になると考えられる。
- (22) 「{96} 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふり行くものは 我が身なりけり」入道前大政大臣
(花を誘って散らす嵐の吹く嵐の庭は、雪のように花が降りくるが、実は雪ではなく、真に古りゆく(年取る)ものは、このわが身なのだった。)
- ・「花」は桜を指し、春の季語である。「雪」は冬の季語である。[春-冬]という反義語を連想させる語彙の対立が見られる。四季の反義語にかんして、以下で論じる。
- 四季(春夏秋冬)の反義語関係について、少し考えてみよう。『活用自在反対語対照語辞典』『三省堂反対語対立語辞典』『三省堂反対語便覧』では、「春」という語彙の反義語として、[春-秋]のみが挙げられている。しかし、『反対語対照語辞典』では、[春-秋][春-夏][春-冬]の三通りの対立の可能性が示されている。辞典からも分かるが、「春」にとって反義語は、[春-秋]が典型的とは言え、[春-夏]と[春-冬]という対立の可能性も否定できない。それは、なぜだろうか。これに関連する宮地(1981)の興味深い調査を以下に紹介する。
- 宮地(1981)は、「冬」と「春」の反義語について、大学生200名に対して調査を行い、その結果を報告している。まず「冬」の反義語には、192

名が「夏」を選び、無回答が8名であった。また「春」の反義語は、「秋」を選んだ学生が163名、「冬」が13名、「夏」が2名、無回答が21名であった。宮地は、「春」の反義語に「冬」と「夏」を選んだ学生がいたことが予想外であった。この結果は、四季に対するイメージに個人差があるのではないかと思ひ、別の100名の学生に春・夏・秋・冬をどのように意識しているかの調査を行った。もし脳裏に四季を図として感じ取っている場合には、描くように指示した。その結果、5種類の型が認められた(宮地1981:57)。1型は、四季を一線に並んで捉え、1週間のように推移すると考えるので、[春-秋]の対立がしにくいのではないかと指摘している。2型は、温度曲線のように上がったり下がったり推移している。このグループでは、[春-秋]の弱い対立の意識はみられる。1型と2型は、共通して、四季は推移するものと考えている。『枕草子』には、「ただ過ぎに過ぎるもの。帆かけたる舟。人の^{よわい}齡。はる、なつ、秋、冬」と、四季をひたすら過ぎてしまうもの、つまり推移するものとして捉えていることや、「たとしへなきもの。夏と冬と。夜とひると……」とあり、夏と冬は、違いがありすぎて比べようもないものとしているが、春と秋には触れていないことから、清少納言は、2型だったかもしれないと示唆している。3型は、夏と冬が両極にあり、真ん中に春と秋がある。4型は半円を成している。四季を春と夏秋冬、または、夏と春夏秋冬と考える者は、春か夏が四季の中心だと考えるので、図では、春か夏が上向きの半円の頂点にある。四季を冬と春夏秋として考える者は冬が四季の代表であり、図では下向き半円の最も低い点に位置している。5型は、円を成し、春・夏・秋・冬が循環する図で、宮地自身の意識もそうであったが、調査で最も多かった。5型には多様な図があったが、基本的には円で向かい合うので、[春-秋]の対立がわかりやすいであろうと推測している。

4.2.2 空間

(23) 「{83} 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山

の奥にも 鹿ぞ鳴くなる」皇太后宮大夫
(この世の中には、逃れる道はないものだ。いちずに思いつめて入った山の奥にも、悲しげに鳴く鹿の声が聞こえる。)

- ・「世の中」は、現世・社会・国家、世間、世の中を指し、「山の奥」は、俗世間から離れた場所として対比されている。「世の中」は、生活が営まれる中心で、山の奥は、世の中から外れたところにあることから、「世の中」：「山の奥」は、[中-外]として関係概念の空間にかんする反義性が認められる。

- (24) 「{100} ^{ももしき}百敷や ^{のきば}古き軒端の しのぶにも なほあまりある 昔なりけり」順徳院
(宮中の古びた軒端の忍ぶ草を見るにつけても、しのんでもしのびつくせないものは、昔のよき御代なのだった。)
- ・「^{ももしき}百敷」は、宮中や内裏を意味し、「^{のきば}軒端」は皇居の軒を指すことから、[中-外(端)]という反義性を含蓄している。

4.2.3 人間関係

- (25) 「{8} わが庵は 都のたつみ しかぞ住む 世をうち山と 人はいふなり」喜撰法師
(私の^{いおり}庵は 都の東南にあつて、このように心のどかに暮らしている。だのに、私がこの世をつらいと思って逃れ住んでいる宇治山だと、世間の人は言っているようだ。)
- ・「わ」と「人」が、[私-世間の人々]の反義語として用いられている。^{8) 9)}

- (26) 「{14} ^{みちのく}陸奥の しのぶもぢずり ^{たれ}誰ゆゑに 乱れそめにし われならなくに」河原左大臣
(^{みちのく}陸奥の しのぶもぢずりの乱れ模様のように、他の誰のせいでみだれはじめてしまったのか、私のせいではないのに……。ほかならぬあなたのせいなのですよ。)

- ・[ほかの誰-自分]の対立があると考えられる。反義語辞典には「誰」は扱われていないが、上の歌では、「誰」は「あなた」を間接的に

- 指しているのが、[あなた-わたし]の対立が根底にある。
- (27) 「{15} 君がため 春の野に出て 若菜つむ わが衣手に 雪はふりつつ」 光孝天皇
(あなたのために、春の野に出かけて行って、若菜を摘んでいる私の袖に、雪が次から次へと降りかかってくるのだ。)
- ・「君」と「わ」の対立があるので、[あなた-私]という反義語と考えられる。
- (28) 「{38} 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな」 右近
(忘れ去られる私自身のことは何とも思わない。ただ、いつまでも愛すると、かつて神に誓ったあの人を命を落とすことになるのが惜しまれてならないことよ。)
- ・「身」は「私自身」¹⁰⁾の意味で、「人」は恋する「相手」を指す。[私-あなた]という反義語として捉えられる。
- (29) 「{40} 忍ぶれど 色に出にけり わが恋は 物や思ふと 人の間ふまで」 平兼盛
(心のうちにこらえてきたけれど、顔色や表情に出てしまっていたのだった。私の恋は、恋のものの思いをしているのかと、人が問うまでになって。)
- ・「わ」と「人」(周囲の人)との対立から、[私-他人]と考えられる。反義語辞典に[私-他人]はないが、[自分-他人]はある。『広辞苑 第六版』では「自分」の意味は、名詞と代名詞に分けられ、代名詞の意味は「わたくし/われ」であるので、[私-他人]は典型的ではないが周辺的な性質の反義語といえよう。
- (30) 「{41} 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひ初めしか」 壬生忠見
(恋しているという私の噂が早くもたったのだった。誰にも知られないように、心ひそかに思いはじめていたのに。)
- ・「わ」(私)と「人」(周囲の人)の対立で、[自分-他人]と考えられる。
- (31) 「{44} 逢ふことの 絶えてしなくは なかなか 人をも身をも 恨みざらまし」 中納言朝忠
(もし逢ふことが絶対にならないのならば、かえって、あの人のつれないさも、わが身のつたない運命も恨むことはしないのに。)
- ・「人」(相手)と、「身」(自分自身)の対比から、反義語辞典にあるような[相手-自分]と考える。
- (32) 「{92} わが袖は しほひに見えぬ 沖の石の 人こそしらね かわくまもなし」 二条院讃岐
(私の袖は、引き潮の時にも海中に隠れて見えない沖の石のように、人は知らないだろうが、涙に濡れて乾く間もない)
- ・「わが袖」は「自分の袖」であり、それに対して「人」は世間一般の人、または、恋人のどちらの意味も表す。そこで、恋人を「相手」と考えると、反義語辞典にも示されているように[自分-他人/相手]となる。
- (33) 「{95} おほけなく うき世の民に おほふかな わが立つ袖に 墨染めの袖」 前大僧正慈円
(身のほどもわきまえず、私はつらいこの世を生きる人々におおいかけることだ。この比叡の山に住みはじめたばかりの私のこの墨染の袖を。¹¹⁾)
- ・「民」は、世の人のことで、自分以外の人々を指すと考えられる。「わ」(私)と対比されているので、[他人-自分]という反義語とみなされる。
- (34) 「{97} 来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ」 権中納言定家
(いくら待ってもいない人を待ち続け、松帆の浦の夕なぎのころに焼く藻塩のように、私の身もずっと恋いこがれていることだ。)

- ・「人」は「恋人」を、「身」は「自分」を意味するので、[相手-自分]の反義関係がある。

4.3 形状性概念

森岡 (2008a:49-51)によると、形状性概念は、いわゆる形容詞と形容動詞類の語基である。日本語には、和語・漢語系があり、[大き-小さ][高-低][早-遅]が和語系語基の例であり、[静-動][優-劣][安-危]が漢語系語基の例である。百人一首には、形状性概念の反義語が極めて少なく、2例だけであり、その内の1例は4.5で扱う。

- (35) 「{64} 朝ぼらけ 宇治の川ぎり たえだえに
あらはれわたる 瀬々の網代木」権中納言定頼
(明け方、あたりがほのぼのと明るくなるころ、宇治の川の川面に立ちこめていた霧がとぎれとぎれになって、その絶え間のあちらこちらから点々と現れて川瀬川瀬の網代木よ)
- ・「絶えだえ」(形容動詞)が「とぎれとぎれに」の意味で、「わたる」は「空間的な広がり」を表現している。異なる品詞であるが、「わたる」が連体形で形容詞的な働きをしているので、形容動詞「絶えだえ」の反対の意味を表しているとみなす。そこで、[途切れている状態-連続して広がっている状態]という対立した意味を感じ取ることができる。

4.4 動作性概念

動作性概念は動詞類の語基を指すだけでなく、文法的に[肯定-否定]と[能動-受動]が反義語関係を形成する。一つの語基から成り立つ[肯定-否定](例:[見る-見ない]), [能動-受動](例:[見る-見られる])また、異なる語彙のペアが反義語である[相対的対立](例:[浮く-沈む])に三分類される。[肯定-否定]の動詞が用いられている歌が一首あるが、2組の反義語が含まれているので、4.5で扱う。また、[能動-受動]の例はなく、以下に示す通り、[相対的対立]としての反義語ペアは、以下の9首にみられた。

- (36) 「{18} 住の江の 岸による波よるさへや 夢の通ひ路 人めよくらむ」藤原敏行朝臣
(住の江の 岸に寄る波 のよるではないが、夜でも夢の通ひ路 を通って逢えないのは、あの人夢の中でも人目を避けているからであろうか。)
- ・「よる」は「ちかづく」で、「よく」は「避ける」を意味する。つまり、[寄る-避ける]と表わされる反義語と考えたいが、反義語辞典には見つけれないペアである。しかし、『反対語対照語辞典』では、「避ける」の反義語は、「向かう/ぶつかる」であり、「よる」の反義語として「引く/はなれる(離れる・放れる/ちる(散る))」がある。「向かう」と「ちかづく」、「避ける」と「離れる」は類義語ではないが、意味的に近い関係にある。従って、[寄る-避ける]を反義語とみなすことができると言えよう。
- (37) 「{21} 今来むと いひしばかりに 長月の 有明の月を 待ち出でつるかな」素性法師
(今すぐに来ようとあの人が出てきたばかりに、九月の夜長を待ち続けているうちに有明の月が出てきてしまったことだ。)
- ・「来る」と「出でる」の対立は、現代語では[来る-出る]である。「来る」と「出る」は逆方向の動作を表すと考えられる。しかし、反義語辞典では「来る」の反義語は「行く/去る/帰る」、「出る」の反義語は「入る」である。従って、[来る-出る]は典型的でなく周辺的な対立と捉えられる。
- (38) 「{52} 明けぬれば 暮るるものとは 知りながら なほうらめしき 朝ぼらけかな」藤原道信朝臣
(夜が明けてしまうと、やがて日が暮れ、あなたにまた逢うことができるとはわかっているものの、それでもやはり恨めしい夜明けですよ。)

- ・「^あ明る」(夜が明ける)と「^く暮る」(日が暮れる)は、現代語では[明ける-暮れる]で、典型的な反義語である。
- (39) 「{55} 滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ」大納言公任
(滝の水音は聞こえなくなっから長い年月がたってしまったけれども、その名声だけは流れ伝わって、今でもやはり聞こえてくることだ。)
- ・「絶ゆ」(絶える)は、「なくなる/途絶える」の意味で、「流る(流れる)」は「次第に広まる」を意味する。反義語辞典では、「絶える」の反義語は、「続く」や「つながる」である。また「広まる」の反義語は「狭まる」である。典型的な反義語とは言えないかもしれないが、[無くなる-広まる]の関係は、ある程度の対比が含まれると感じられる。
- (40) 「{65} 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 恋にくちなむ 名こそ惜しけれ 相模
(恨んだ末に、もう恨む気力も失って、涙を乾かす間もない袖さえ惜しいのに、まして、この恋ゆえに世間に浮名を流して朽ちてしまうであろうわが名が、いかにも惜しいことです。)
- ・「あり」(ある)の主語は袖で、「くつ」(朽ちる)の主語は名であるが、動詞だけを比べると、[ある-ない]という対立が暗示されている。
- (41) 「{77} 瀬をはやみ 岩にせかる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ」崇徳院
(川瀬の流れがはやいので、岩にせきとめられる給料が二つに分かれてもまた一つになるように、恋しいあの人と今は別れても、いつかはきっと逢おうと思う。)
- ・「われても」は「わる」(分かれる)の意味で、「あはむ」は「あふ」「合う」である。[分かれる-合う]の対立は、別れた水が合うことと、
別れた男女が逢うことの二つの意味を表す。
- (42) 「{87} 村雨の 露もまだひぬ まきの葉に 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ」寂蓮法師
(降り過ぎていった村雨の 露もまだ乾いていない真木の葉のあたりに、霧がほの白くわきあがってくる 秋の夕暮れであるよ。)
- ・「立ちのぼる」は「立つ」と「のぼる」の複合動詞で「這い上る」というような意味である。「夕暮れ」の「暮れ」の部分は名詞ではあるが、「暮る」は「日が落ちて暗くなる」の意味であるので、「(日が)落ちる」と考えることで、「のぼる」との反義語のペア[のぼる-落ちる]が暗示されている。
- (43) 「{89} 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることのよわりもぞする」式子内親王
(わが命よ、絶えてしまうのならば絶えてしまえ。このまま生きながらえているならば、堪えしのぶ心が弱まると困るから。)
- ・「絶ゆ」(絶える)は、「死ぬ」という意味もあるので、「ながらふ」(生きながらえる)とは反義関係がみられる。現代語では、[死ぬ-生きる]という反義語に相当するだろう。
- (44) 「{91} きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき ひとりかもねむ」後京極太政臣
(こおろぎの鳴く、霜のおりる寒い夜、むしろの上に衣の片方の袖を敷いて、私はひとり寂しく寝るのであろうか)
- ・きりぎりすは、現代語では、こおろぎを指す。虫が「鳴く」という語は反義語関連の4冊の辞典では扱っていない。虫が鳴いている時は必ず起きていて、寝てはいないはずなので、「鳴く」と「寝る」の組み合わせから、[起きる-寝る]に近い反義関係が創造されたと考えられないだろうか。

4.5 2組の反義語

次に、2組の反義語が使用されている歌を取り上げる。全部で3例である。2種類の反義語は、それぞれ下線と二重下線で示されている。

(45) [動作-動作]

「{10} これやこの 行くも 帰るも 別れては
知るも 知らぬも 逢坂の関 蟬丸

(田子の浦にでてみると、真っ白な富士の高嶺にしきりに雪が降っていることだよ)

- ・「行く-帰る」は、語彙が異なる[相対性対立]である一方、「知る-知らぬ」は、語基が同じである、[肯定-否定]の反義語である。

(46) [関係-動作]

「{49} みかきもり 衛士のたく火の/夜は燃え
昼は消えつつ 物をこそ思へ」 大中臣能宣

(御垣守である衛士のたく火が、夜は燃えては昼は消えているように私も夜は恋の炎に身をこがしては昼は消え入るように沈みこむことを繰り返すばかりで、物思いに悩むほかはないのだ。)

- ・[夜-昼]の対比がある。もう一つ[燃える-消える]は、異なる語彙のペアから成る相対的対立である。

(47) [関係-形情]

「{99} 人も惜し 人も恨めし あぢきなく 世を
思ふゆゑに 物思ふ身は」 後鳥羽院

(人がいとおしくも、また人が恨めしくも思われる。おもしろくないものこの世を思うところから、あれこれとも思いをするこの私には)

- ・「人」(自分以外の人)と「身」(自分)の対立である[自分-他人]がある。また「惜し」(手離しがたく、いとおしい)と「恨めし」(うらめしい)とは典型的ではないが反義語と考えられる。反義語辞典では、「いとおしい」と「うらめしい」の反義語はそれぞれ[愛おしい-憎たらしい]、[恨めしい-有難い]

である。

4.6 考察

かなり緩やかな基準で反義語と捉えたこともあるだろうが、『百人一首』の40首に反義語があるという結果になった。しかし典型的でなく周辺の性質の例が多く含まれていたことは否定できない。そこで半数を認めることにすると、約2割にはなる。従って、『百人一首』には、レトリックとしての反義語用法を認めても良いのではないだろうか。

2組の反義語が一つの歌に使用されている数は3例だけであった。残りは、1組のみの反義語を含んでいた。また、名詞が9首、関係概念が20首、形状性概念が2首、動作性概念は11首(12ペア)に使われていた。注目すべき点は、[自分-他人/相手]などの対立が表現されていた人間関係が11首あったことである。また動詞は11首(12ペア)の内、10首(11ペア)が異なる語彙から成る相対的対立であった。また、形状性概念が2首のみで、形容詞・形容動詞の対比はかなり低い割合であった。3.2で言及したが、清海(2011)の結論では、ことわざの反義語は、形容詞・形容動詞がやや頻繁に使用されるということから、短歌に用いられる反義語の性質とは異なることが明らかになった。

5. 反義語の意味変化

反義語を考える上で、考慮に入れておくべきことは、意味変化の可能性である。ことばの意味は、固定したものでなく、時代とともに変化していく。反義語の場合も同様で、意味が変化することに注目すべきである。以下、英語と日本語からの顕著な例を見ることで、変化が単純でないことに気づかされる。

まず、英語から2例を取り上げる。『大修館英語学事典』によると、もともと反義語であるペアが同義語(類義語)として用いられている興味深い場合があるとして、‘flammable’-‘inflammable’「不燃性の→可燃性の」と‘valuable’-‘invaluable’「無価値の→価値のある」の二例が挙げられている。詳しい説明がないので、少し

これらの意味について考えてみよう。最初の例の、‘flammable’-‘inflammable」という、一見反義語ペアに見える両語を調べて見ると、*Oxford Dictionary of English* (Second Edition, revised) では、実際に、‘flammable’-‘inflammable’の両語は「火がつきやすい」という同じ意味を表す。一般に接頭辞の‘in-’は、‘indirect’‘insufficient’などのように‘in-’以下の語の意味を否定する場合が多い。しかしながら、‘inflammable’の語の成立に於けるラテン語の‘in-’は、否定でなく、英語の‘into’に相当し、語基を強調する役目を果たしている。また、*Fowler’s Dictionary of Modern English Usage* (Fourth Edition) よると、‘flammable’は、‘inflammable’の‘in-’が否定を表すのではないかという曖昧性を排除するために、現代英語では、‘flammable’ (可燃性の) を‘non-flammable’ (不燃性の) に対応する語として用いられているが、一般的にはそれほど普及していないという。同様に、『研究社 新英和大辞典』は、‘inflammable’が、‘non-flammable’の意味と誤解され易いため、工業・商業の用語としては、‘flammable’の方が好まれ、この傾向は、一般にも及びつつあると書かれている。

次に、‘valuable’-‘invaluable’のペアは、‘inflammable’とは異なり、‘invaluable’は、接頭辞の‘in-’が、否定を表すのである。しかし、‘valuable’ (価値のある) を単に否定するのではなく、結果的には、その意味を強調することになり、「価値をつけられないほど貴重な」を表す。従って、‘valuable’と‘invaluable’は、両者とも肯定的な意味で、度合いが違うだけということになる。また、‘valuable’と‘invaluable’の両語に対する反義語は、‘valueless’ (価値のない) になる。¹²⁾

以上のように、反義語の関係は、形態素から判断できないことがあり、必ずしも分かり易いとは言えない語彙があることに注意すべきである。上でみた英語の例は、反義語であるペアが同じ意味として用いられるようになったのであるが、次に逆の例をみてみよう。即ち、一つの形で、相反す

る二つの意味を表すことになった語の例として、「不-」という否定の意味の拘束形態素を含む日本語の「役不足」がある。新野(1993)は「役不足」という語が、近年、正反対の意味に誤用されていることに言及し、対義的方向への意味変化の過程を考察している。「役不足」の本来の意味は、「役目が軽すぎて能力が十分に発揮できないこと(への不満)」であったが、近年では、①「能力不足で役目が果たせないこと」または、②「ある目的を果たすには役目が軽すぎること」の二つの対義の意味に変化しているのである。例えば「あなたは、秘書では役不足だと思うので、もっと責任あるポストに挑戦してはどうか」は本来の意味を表しているが、「私の実力では、この仕事には、役不足で、皆様に大いにご迷惑をおかけした」は最近の誤用の例となる。『広辞苑 第六版』(2008)は、以下のように「役不足」の意味を二つに分け、さらに近年の誤用についても触れている。

- (48) ①俳優などが、自分に割り当てられた役に対して不満を抱くこと。
②その人の力量に比べて、役目が軽すぎること。「-の感がある」
▷誤って、力不足の意に用いることがある。

また、デジタル大辞泉の解説¹³⁾によると、平成24年度に文化庁が発表した「国語に関する世論調査」では、「役不足」を本来の意味(=本人の力量に対して役目が軽すぎること)として理解して使う人が41.6%で半数以下という結果が出た。それに対して、正反対の意味(=本人の力量に対して役目が重すぎること)で使う人が51.0%ということが分かり、誤用での利用者の方が多く、半数以上となっている。

以上から、否定の接辞が語にあるからと言って、必ずしも語基の意味が否定されるわけではないことや、対義の意味に変化することも確認した。別の例では、「気が置けない」は、元来は、「遠慮しなくても良い、気遣いの必要がない」という意味だったのが、最近では、逆の意味に誤用されている。

『広辞苑 第六版』によると「近年誤って、気を許せない、油断できないの意で用いることがある」ということは、一つの表現でも反義性を表す可能性があることを示唆している。

最後に日本語の形容詞の例を時代の推移から見てもみよう。次元形容詞について、宮地(1970)は、現代日本語と古代日本語の反義語の違いを考察している。現代日本語の反義語：[長い-短い][高い-低い][大きい-小さい]の中で、[長い-短い]は、奈良時代から安定して用いられているが、残りの二組は、そうではないと述べている。[大きい-小さい]は、古くは、[おほきなり-ちいさし]であった。その理由は、ク活用形容詞の語幹末音節のイ例音が立ちにくいという原則から、形容詞の「おほきし」が存在できずに、中世のある時期までは、「ちいさし」の反義語としての形容詞が存在しなかった。そのため、「ちいさし」は形容詞であるが、反義語は形容動詞「おほきなり」となった。[高い-低い]の関係も、「低い」が近世初頭以降に用いられるようになるまで、「ひきし」が中世まで使われていた。「おほきし」と同様に、中古では、ク活用形容詞の語幹末音節のイ例音が立ちにくいという原則から、「ひきし」でなく、「ひきなり」が存在したと考えられる。「ひきなり」は、主に漢文訓読用の語であったようで、一般の文章で自由に使われていなかったらしい。¹⁴⁾ そのため、和文資料では、低いという意味は「みじかし」などの語によって表現されていた。このように、中古まで「低い」を表す形容詞が存在しなかったので、[ながし-みじかし]が本格的用法であったが、同時に、[たかし-みじかし]という対立もみられた。(44)は、枕草子からの例であるが、(44i)の下線部は、氷柱が長かったり短かったりという現在の反義語[長い-短い]に相当し、(44ii)の下線部は、背の高い人が「たかし」で、低い人は「みじかし」で表現されている。

- (49) (i) 垂氷いみじうしだり (中略) 水晶の滝
 などはましようにながくみじかく
 <枕草子：十二月二十四日、宮の御仏名の>

- (ii) [三尺ノ几帳ヲ間ニ] 外に立てる人と内に居たる人と物言ふか、顔のもとにいとよくあたりたらこそをかしけれ。たけのたかくみじかからむ人などやいかがあらむ。
 <枕草子：内裏のつぼね>

さらに、近世以前の「たかし」の反義語は安定していなかったため、[たかし-ふかし](例：たかき山、ふかき谷)という反義関係も存在した。現代日本語では、[高い-低い]、[深い-浅い]のように、垂直次元で同じ方向としての反義関係があるが、[たかし-ふかし]は、垂直方向に量が大であることを共通基盤とし、基準面から上か下かの反義関係を表した。宮地は、この反義語は、漢詩文の影響から人工的に文言用に用いられたと思われる一方で、古代日本語にあった反義語の意識を触発したのではないかと述べている。

6. 結論

本稿は、反義語の分類方法を概観し、『百人一首』の反義語について検討した。2節では、反義語の分類について、参考にした4冊の反義語辞典の考え方を紹介した。また、意味特徴の観点から、反義語をグループ分けしている先行研究を扱った。その後、森岡(2008a)の提案する抽象概念に基づく分類と実際の用例について取り上げた。3節は、『百人一首』の成立と和歌の表現技法について論じ、4節では、『百人一首』に於ける反義語の用例を検討した。その結果、40首に反義語が認められた。かなり緩やかな基準で調査したので総数が増えた可能性がある。しかし半数を認めることにしても、約2割にはなるので、『百人一首』には、レトリックとしての反義語用法を認めてはどうかと提言した。また人間関係が11首あったことが注目すべき点で、[自分-他人/相手]の対立が多く表現されていた。また動詞も11首あったが、形状性概念が2首のみで、形容詞・形容動詞の反義語が少ないことも分かった。最後に、5節では、反義語の意味変化が単純ではないことを日英語の興味深い例を通して確認した。

注

- 1) 池上(1982:219-220)は、換位関係にある表現が基本的には、「行く-来る」という対立に還元できる理由として次の例をあげている。「AがBにXを売る」は、「XがAからBに行く」であり、「BがAからXを買う」は、「XがAからBに来る」と考えられ、到着点が非中心的または中心的のどちらとして把握されるかで区別されている。
- 2) 長さの単位で、分かりやすく説明すると、inch(2.54cm)-foot(30.48cm)-yard(0.9144m)であり、12インチが1 foot (フット)で、footの3倍(3feet=フィート)が1 yard(ヤード)になる。
- 3) 森岡(2008a:52)は、抽象概念を表す名詞についても、具体名詞と同様に本来反義語が存在しないと考えている。[和文-漢文][個人-社会][自然-人工]のように対立させることもできるが、一種のセット語とみるべきであると述べている。
- 4) 森岡の「セット語」に関連する分類方法として、山田(2015)の「文化的反義語」が挙げられる。山田(2015)は、①段階的反義語、②相補的反義語、③方向的反義語という三分類に当てはまらない反義語で、文化的背景を持つ第4のカテゴリーを「文化的反義語」として提案している。文化的反義語とは、多項非両立性の関係にある内の二語が、実際の言語使用で選択され、相補的反義語のように扱われることだと定義している。取り上げている例は、名詞が多く、例えば、アメリカのスーパーのレジで聞かれる‘Paper or plastic?’(「紙袋かビニール袋のどちらがよろしいですか」)や、‘Cash or charge?’(「現金とクレジットカードのどちらにしますか」)では、[紙袋-ビニール袋][現金-クレジットカード]が文化的反義語である。しかし、国が違えば、これらの対立は変化するので、文化的反義語の特徴は、コンテキスト依存であると述べている。
- 5) 伊藤(1973)は、百人一首のかかるた遊びとしての歴史と遊び方について説明している。
- 6) 鈴木(他)(2012:8)には、歌番号が『新編国家大観』によるものであると書かれている。
- 7) 古語の意味を確認するために、『旺文社全訳古語辞典』『現代語から古語を引く辞典』『新全訳古語辞典』『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』を参照した。
- 8) 「わ」「ひと」の対立について：『反対語対照語辞典』では、「私(わたくし)」は、「①自分に関する内々のこと。②自称の代名詞。わたし」の意味で、その反対語・対照語には、「公(おおやけ)」と「あなた(貴方)」が挙げられている。同様に、『活用自在反対語対照語辞典』は、「私(わたくし)」の意味を「①自分を丁寧な言い方で呼ぶ語。②個人的な。民間の」と定義し、その反対語・対照語は、「あなた」(=貴方：軽い敬意をもって相手と呼ぶ語)と「おおやけ」(=公：広く一般の。社会の。国家の)の二語である。一方で、「われ(我)」の項に関して、これら2冊の辞書の見解は異なっている。『反対語対照語辞典』は、「われ(我)」には、「なんじ(汝)」と「かれ(彼)」の二語が反対語・対照語として示されている。それに対して、『活用自在反対語対照語辞典』は「われ(我)」を「自分。わたし」と定義し、その反対語・対照語に、「かれ(彼)」(=他称の人称代名詞)、「なれ(汝)」(=あなた。お前)、「ひと(人)」(=他人。自分以外の人物)の三語が挙げられている。
- 9) 「ひと」の古語の意味は、代名詞用法を含め現代語と異なる点がある。『新全訳古語辞典』では、以下のように、名詞の意味6種と代名詞に分けて記述されている。
 1. [名詞]
 - (i) 一般的にいう人間の意。物や他の生物に対する人間。社会的存在としての人間。
 - (ii) 一人前の人間・ひとかどの人物の意。大

人。立派な人物。立派な家柄・身分の人。
人品。人柄。

- (iii) 自分に関係のある人間の意。夫。妻。恋人。家来。侍女。従者。自分に関係のある、ある特定の人。
- (iv) 自分以外の人間や物・自分と対立する人間の意。世間の人々。ほか。よそ。外聞。
- (v) 人気（ひとけ）。人里。
- (vi) ([人の～]の形で) 連体詞のように次の語にかかり、「人の～」全体で、一語のようという言い方。
2. [代名詞]あなた。多く夫婦・恋人の間で相手をさしている二人称。

『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』では、最初に図で「人（ひと）」の全体の意味を「(単に)人間。また、特定の人物や人の属性」とし、下位を[一般]、[特定]、[属性]に三分類されると捉えている。以下のように名詞として全部で8種に分けている。

[一般]

- (i) (動物・植物などに対して) 人間。
(ii) 人間一般。世間の人々。また、他人。

[特定]

- (iii) 大人。成人。
(iv) 立派な人。優れた人。
(v) 臣下。従者。家来。
(vi) (特定の人を直接言わないで) あの人。特に、意中の人。恋人。

[属性]

- (vii) 人柄。性質。
(viii) 身分。家柄。

以上の説明の後に、「発展」という項目で、代名詞の用法として、夫婦の間柄などで、婉曲に相手を指す「人」の例を紹介している。

- 10) 『現代語から古語を引く辞典』によると、「自分」に対応する古語は、「ここもと（此許・処許）」「し（其）」「しこ（醜）」「み（身）」「よ（余・予）」「わがみ（我身）」の6語が挙げられている。

- 11) 伝教大師（最澄）が比叡山延暦寺の根本中堂建立の際に詠んだ「阿耨多羅三藐三菩提の仏達わが立つ^{そま}杣に冥加^{みょうが}あらせたまへ」（一切の心理を悟った御仏たちよ。私が入り立つこの杣山に加護をお与えください）を本歌として「杣山」とは植林した材木を切り出す山のこと、歌では、比叡山を表している。墨染の袖（＝僧衣の袖）を人々に覆いかけるというのは、一般の民を仏の功德で守り、救済することを比喩的に表現したのである。「すみぞめ」は「墨染」と「住み初め」の掛詞である。

- 12) 『ジーニアス英和大辞典』（2001-2008）によると、「invaluable」は、「評価できない[計り知れない]ほど貴重な」で、「valuable」の強意形であり、「金銭的に価値が計り知れないほど貴重な」を意味するのは、「priceless」である。それに対して、同じ接尾辞の「-less」（…のない）を含む「valueless」は、「価値がない」という否定の意味である。

- 13) <https://kotobank.jp/word/役不足-647972>

- 14) 『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』によると、「ひきし」は、中世初期から多く使われ、中世後期には、転じて「ひくし」が使われるようになった。中古の「ひきなり」はあまり用いられず、その代わりに、身分・地位・身長などには「短かし」「浅し」が用いられた。また、声などに「細し」、身長・声などに「小さし」、身分などに「いやし」も使われた。

参考文献

- 伊藤秀文 1973. 『かるたの歴史と遊び方』大修館書店、東京。
池上嘉彦 1982. 「語彙の体系」佐藤喜代治（編）『講座日本語の語彙第1巻 語彙原論』205-223. 明治書院、東京。
奥津文夫 2000. 『日英ことわざの比較文化』大修館書店、東京。

- 清海節子 2010. 「反義語研究の応用—コーパスを利用して類義語を反義語関係から考察する試み—」『駿河台大学論叢』39:115-138.
- 清海節子 2011. 「日本語のことわざに於ける反義語の性質」『駿河台大学論叢』43:77-102.
- 清海節子 2012. 「日本と英語のなぞなぞ比較(1)—反義語の用法を中心に—」『駿河台大学論叢』44:87-110.
- 国文学編集部(編) 2008. 『百人一首のなぞ』學燈社, 東京.
- 鈴木日出男・山田慎一・依田泰 2012. 『原色小倉百人一首』文英堂, 東京/京都.
- 新野直哉 1993. 「“役不足”の「誤用」について—対義的方法への意味変化の一例として—」『国語学』175, 26-38.
- 宮地敦子 1970. 「対義語の条件—「高し」を中心として—」『国語国文』39(7), 1-13.
- 宮地敦子 1981. 「春夏秋冬—対義語の意識—」『言語生活』(352), 56-60.
- 村木新次郎 2002. 「意味の体系」北原保雄(監修), 齋藤倫明(編)『朝倉日本語講座4: 語彙・意味』54-78, 朝倉書店, 東京.
- 森岡健二 2008a. 「対義語とそのゆれ」宮地裕・甲斐睦朗(編)『『日本語学』特集テーマ別ファイル 普及版 意味1』45-52, 明治書院, 東京.
- 森岡健二 2008b. 「私の対義語観」宮地裕・甲斐睦朗(編)『『日本語学』特集テーマ別ファイル 普及版 意味3』60-63, 明治書院, 東京.
- 森田良行 1996. 『意味分析の方法』ひつじ書房, 東京.
- 山田政通 2015. 「文化的反義語の試案」『拓殖大学語学研究』133:149-172.
- 渡部泰明 2008. 「表現論—掛詞・縁語をどう考えるか」国文学編集部(編)90-97.
- Cruse, Alan, D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey N. 1981. *Semantics*, 2nd edn. Harmondsworth: Penguin.
- Lyons, John. 1977. *Semantics I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, Lynne. 2003. *Semantic Relations and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 辞典**
- 『旺文社全訳古語辞典』第4版 宮腰賢・石井正己・小田勝(編) 2014. 旺文社.
- 『活用自在反対語対照語辞典』第4版反対語対照語辞典編纂委員会(編) 2006. 柏書房.
- 『研究社 新英和大辞典』第6版(電子版) 竹林滋(編) 2002. 研究社.
- 『研究社 日本語教育事典』近藤・小森(編) 2012. 研究社.
- 『現代語から古語を引く辞典』芹生公男(編) 2011. 三省堂.
- 『広辞苑 第六版』(電子版) 新村出(編) 2008. 岩波書店.
- 『三省堂反対語対立語辞典』三省堂編修所(編) 2017. 三省堂.
- 『三省堂反対語便覧』(新装版) 三省堂編修所(編) 2008. 三省堂.
- 『ジーニアス英和大辞典』(電子版) 小西友七・南出康世(編) 2001-2008. 大修館書店.
- 『新全訳古語辞典』林巨樹・安藤千鶴子(編) 2016. 大修館書店.
- 『大修館英語学事典』松浪有・池上嘉彦・今井邦彦 1983. 大修館書店.
- 『反対語対照語辞典』第6版 北原保雄・東郷吉男(編) 1998. 東京堂出版.
- 『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』中村幸宏(編) 2009. ベネッセコーポレーション.
- Fowler's Dictionary of Modern English Usage*. Fourth Edition. Jeremy Butterfield (ed.) 2015. Oxford: Oxford University Press.
- Oxford Dictionary of English*. Second Edition (revised). (電子版) 2006. Oxford University Press.